

<小学校 図画工作科>

一人ひとりが表現の喜びを味わうことのできる学習指導の工夫

—— 自由に発想をめぐらす絵の指導を通して ——

南風原町立津嘉山小学校教諭 糸 数 昌 子

目 次

I 研究テーマ設定の理由	41
II 研究仮説	41
III 研究構想図	42
IV 研究内容	43
1 「表現の喜び」とは	43
2 魅力ある題材設定の工夫	43
(1) 魅力ある題材とは	43
(2) 題材の設定の視点と開発	44
3 意欲的に取り組む学習過程の工夫	44
4 個に応じる指導	44
5 学習意欲を高める評価の工夫	45
V 授業実践	47
1 題材名「不思議な世界へ」.....	47
2 題材設定の理由	47
3 題材の目標	47
4 指導計画	47
5 評価計画	47
6 本時の指導	47
7 検証授業の考察	48
VI 研究の成果と今後の課題	50

一人ひとりが表現の喜びを味わうことのできる学習指導の工夫

—— 自由に発想をめぐる絵の指導を通して ——

南風原町立津嘉山小学校教諭 糸 数 昌 子

I 研究テーマ設定の理由

これからの社会は、科学技術の進歩や情報化等による社会の変化が、加速化、拡大化する傾向にある。このような社会においては、あふれる情報の中から自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力が必要であり、子どもたち一人ひとりが自らのよさを発揮しながら、主体的・創造的に生きていくための資質や能力、すなわち「生きる力」を育てていくことが求められている。

このようなことから、学校教育においては、これまでの知識を一方向的に教え込むことになりがちであった教育を見直し、子どもが自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す必要がある。図画工作科においても、表現活動の過程において、自分なりの思いをもち、自分で材料を選択しながら自分なりの方法で表現していけるようにすることを重要視している。

ところが、これまでの授業を振り返ってみると、多くの子が図工の時間を楽しみにしているにも関わらず、絵を描くとなると消極的になりがちであった。作品も子どもたち一人ひとりの思いやよさが生かされず似かよったものが多かった。その原因として、高学年になり合理的・客観的に見たり考えたりする能力が高まり、子どもたちの意識の中に絵は実物通りに描かなければならないという思いが強くなったことが考えられる。その結果、「見たとおりに描けない」「思い通りに描けない」という理由から苦手意識を持っているようである。それはアンケート結果においても顕著に表れている。さらに、教師から与えられた題材に自分の思いをもつことができなかったことや表現活動においては、白い画用紙に絵の具だけで彩色するワンパターンな方法に限られていたことなどがあげられる。教師も一人ひとりの思いを十分に把握することができず子どものもつよさや可能性を引き出すような指導が不十分であったことが反省点としてあげられる。

本来、子どもたちは、何かを作りたい、思い感じたことを表現してみたいという表現欲求がある。

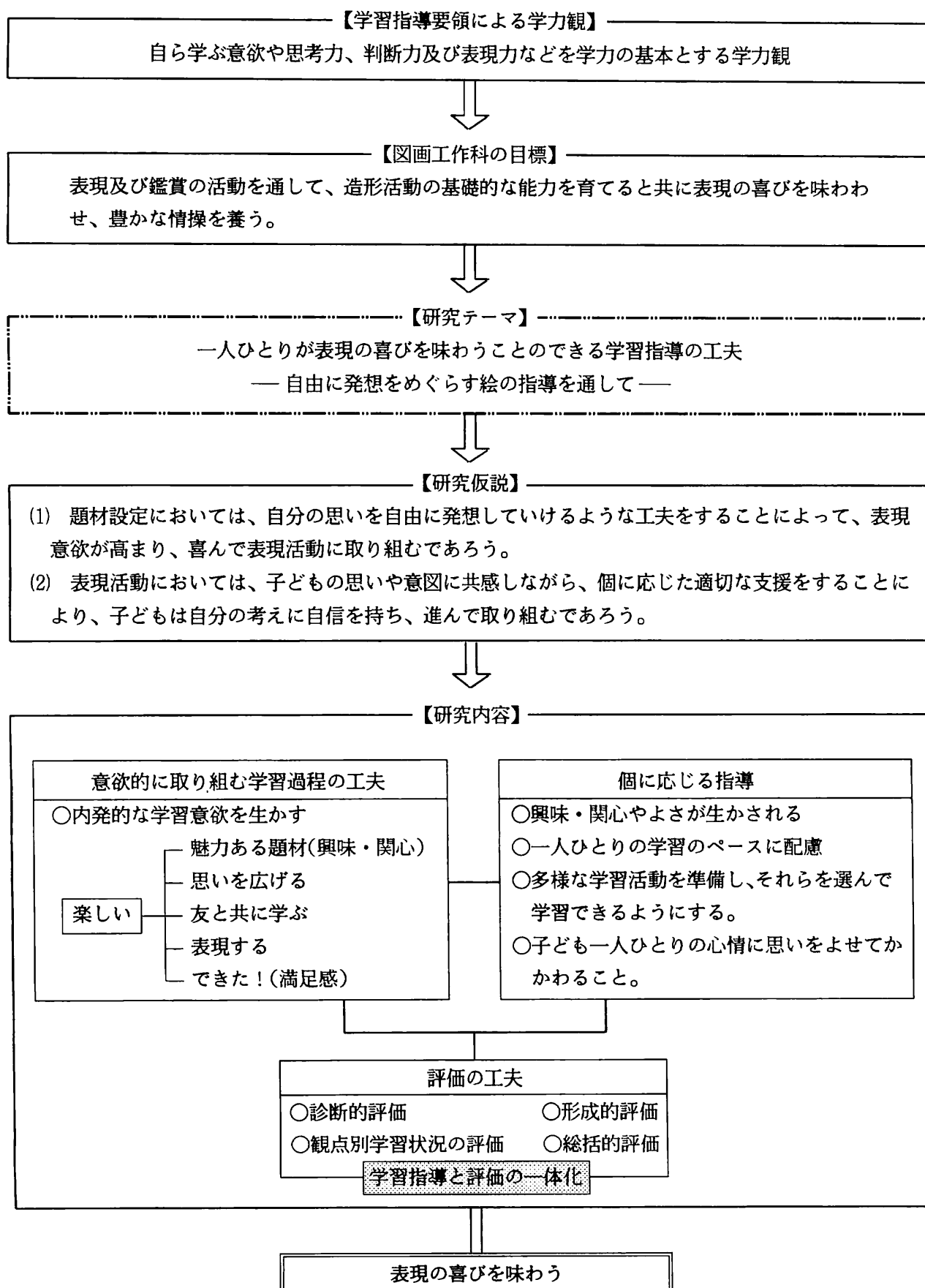
教師の役割はそのような子どもの思いを引き出し、さらに意欲的に取り組ませることだと考える。それには、教師が子ども一人ひとりの内発的な意欲や思いを大切にし、その思いを広げさせる手助けをすることである。そして、子どもたち一人ひとりが自由に発想しながら自分の思いを表現していけるようにすることが大切であると考えている。そこで、授業においては、まず、魅力ある題材を工夫し、自分なりの表現への思いを明確にさせ、自分の思いにあった材料や方法を自由に選択しながら表現活動に取り組むようにさせたい。

そのようなことから、本研究においては、子どもたち一人ひとりが表現の思いをもち、多様に発想したり構想したりしていけるような題材設定の工夫をし、自由に発想をめぐるながら自分の思いをうまく表現していけるような支援をし、一人ひとりが表現の喜びを味わうことのできる学習指導のあり方を探っていこうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 題材設定において、一人ひとりの思いを自由に発想していけるような工夫をすることにより、表現意欲が高まり、喜んで表現活動に取り組むであろう。
- 2 表現活動において、児童の思いや意図に共感しながら、個に応じた適切な支援をすることにより、子どもは自分の考えに自信を持ち、進んで取り組むであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 「表現の喜び」とは

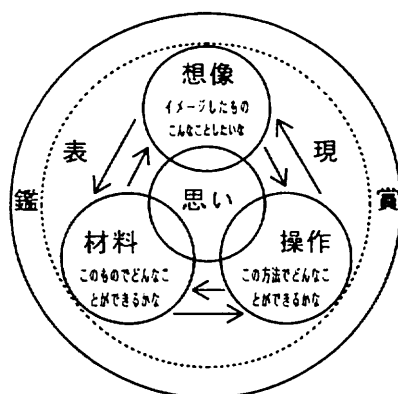
表現とは、本来自分の内部に発生した「心の思い」を何らかの形で外部に表すことであるが、表現方法は、文字や言葉、音楽、身体などと多種多様である。図画工作科における表現とは、形や色、線、材料などによる直接的で直感的な性格をもつため、子どもたちにとっては、親しさをもてるうえ自分の思いにあわせて表現方法や材料などを自由に選んだり、思いのままに試みたりすることができる。

子どもたちは、感じたことや思ったことなどを何らかの方法で表現したいという欲求や願いをもっている。その思いを色や形などで表したり、作ったりすることによって表現欲求を満足させ、表現の喜びを味わうことができる。

表現活動において根底にあるものは、「思い」であり、それを発生させなければ、真の表現とは言えない。つまり、教師の思いや友だちの思いをいくら上手に表してもそれは自分の思いを満たしたことになる。

岡田惣吾氏は、表現指導ののポイントとして以下のように述べている。

図1 思いの発生



★ 思いを発生させるためのきっかけ作り

何もないところから思いは発生しない。何らかのきっかけを与え、表現への興味・関心を持たせることが大切である。その根底に、教師と児童との信頼関係が必要である。

★ 表現を通した思いの伝達活動

思いが発生すると表現活動が開始される。活動の様子を見守りながら、支援的な指導をする。

★ 子どもの思いの共感的な理解

表現の過程を大事にし、共感的理解を深め、思いをうけとめる。そのことが、表現の喜びを高め、満足感を充足し、教師への信頼につながる。

図画工作科の授業の中での表現活動は、主に教師側から題材として提案され、子ども側に表現の思いが生まれてくる。発生した思いは、表現活動を通して外部に形づくられ、友だちや教師に伝達される。よって教師は、子どもの思いがうまく表現を通して伝達できるように温かく見守り、支援的な指導をするように心がけ一人ひとりの子どもが表現の喜びを味わうようにさせることが大切である。

このような子ども達の造形表現活動において、子どもは自分の思いが表現できた喜び、また、友だちや教師に認められた喜びを感じ、満足感を充足することになるだろう。そして、造形的な表現活動によって自分の思いを表現できた喜びは、他の表現活動とも関連しながら高まり、その子のもつよさを伸ばしたり高めたりすることにもつながる。

2 魅力ある題材設定の工夫

(1) 魅力ある題材とは

図画工作の授業は、題材による表現及び鑑賞の活動を通して展開される。

題材とは、目標や内容、材料・用具、表現方法・過程、指導方法など総合的に構想した「学習活動のまとまりのこと」である。そこで、子どもたち一人ひとりが主体的に関わることでできる魅力ある題材を設定することは、新しい学力観に基づいた子どもの側にたった授業を構想するにあたっての大きな課題となる。

魅力ある題材とは、子どもが自らの思いを持つ事ができ、意欲的に表現活動に関わっていく中で、自然に造形的な諸能力も培われていく要素を持った題材ととらえた。

(2) 題材の設定の視点と開発

- ① 一人ひとりの子どもにとって価値がある題材
 - ・自分の思いをもつことができ、望ましい創造活動ができるか。
- ② 興味あることがらが盛り込まれている題材
 - ・想像力や知的好奇心などが刺激される内容を含んでいるか。
 - ・家庭や地域との関連性を考慮したものであるか。
- ③ 想像力を豊かにふくらませる場がある題材
- ④ 造形的な諸能力を育てる場がある題材
 - ・基礎的・基本的な内容が含まれていて、多様な表現方法が考えられるか。
- ⑤ 思いを具体化するための工夫する場がある題材
 - ・試行錯誤しながら工夫する場があるか。
 - ・適度に技術的な困難さがあり、成就感が得られるか。

表 1 題材の開発における教師の姿勢

☆日常から子どもの実態や個々の特性を把握する。
つぶやき ・ 日常の話題 ・ 遊び 生活経験 ・ 学習経験 ・ 興味など
↓
子どもとのふれあいから
☆造形文化への理解に努める。
☆豊かな夢や願い、子ども心を持っている。

3 意欲的に取り組む学習過程の工夫

子どもが意欲的に取り組む授業を展開するためには、子どもたち一人ひとりが思いを持ち、よさや可能性などを生かすことができる場や機会を取り入れる必要がある。子どもの想像を広げ、深める学習の過程を次のように工夫する。

	思いをもつ	思いを構想する	思いを表現する	よさを見つける
子ども の 活 動	「おもしろそう」 「やってみよう」 ・説明を聞く ・興味・関心を持つ ・見通しを抱く ・意欲がわく	「どうしようかな」 「これにきめた」 ・イメージの定着 ・主題の決定 ・表現方法の選定 ・構想、計画	「楽しいな」 「工夫して、最後まで頑張ろう」 ・主題の確認 ・表現の試み ・表現の工夫	「さあ、できたぞ」 「友だちのものも見てみよう」 ・作品の完成 ・見直しや修正 ・完成と伝達の喜び
教師 の 役 割	・題材に興味や関心を持たせる。 ・学習に対する意欲を高めさせる。 ・学習の計画を知らせ、表現に必要なことを説明する。	・おぼろげなイメージを明確にさせ、描きたい思いをはっきりさせる。 ・構想を練らせ、計画を立てさせる。 ・めあてをもたせる	・どの子ども心を開き活動できる雰囲気や場を作る。 ・必要に応じ補助材料を提供したり、ヒントや資料の提示をし支援する。	・活動のよさや頑張ったところを受け止め子どもの喜び、自信、意欲をとらえる。 ・次時の計画や表現への意欲がけ。

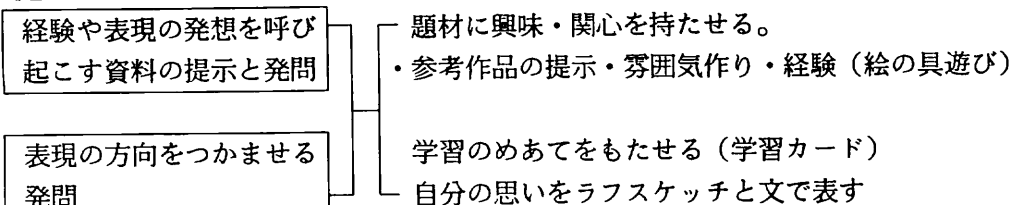
4 個に応じる指導

個に応じる指導は、子ども一人ひとりが持っている能力を十分に発揮できるようにするとともに、それを伸ばしていくことが基本である。子どもは、同じ年令であっても、生活環境を始め特性や能力、持ち味、得意・不得意などは様々である。そのような子どもたちの個性や持ち味などを生かしながら支援し、その子なりに何らかの進歩が得られるようにすることが大切である。

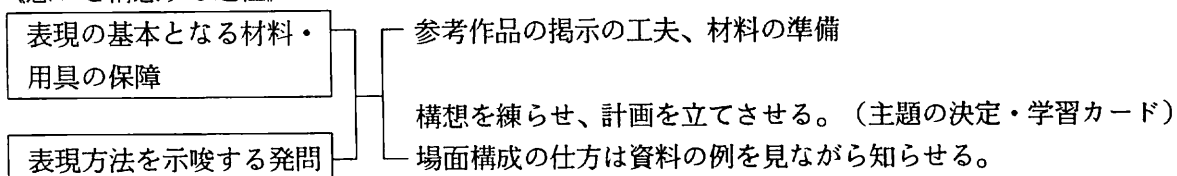
方法として、様々な表現の表れを個性として受け入れ、日常の学習活動などから継続的な支援を行う。教師の持つ造形感覚や経験などと重ね合わせて観察をし、個に応じてヒントを与えたり、子どもの意図を尋ね対話をするなかから自分で解決策を見つけさせるようにする。また、教師は、子どもの取り組んでいる姿や表情、つぶやき、作品などから思いや試みのよさを読みとったり、感じとったりする。

支援の工夫

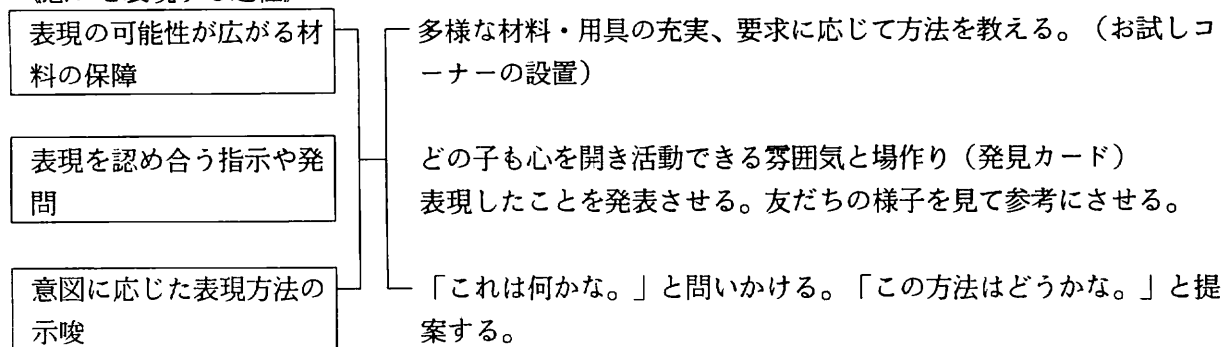
《思いをもつ過程》



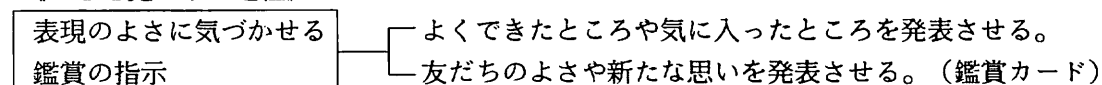
《思いを構想する過程》



《思いを表現する過程》



《よさを見つける過程》



5 学習意欲を高める評価の工夫

評価は、子どもの学習活動をより効果的にするための学習指導の一環である。子どもが意欲を高め進んで学習活動を展開するようにするには、子ども一人ひとりのよさを認め、それを生かすように、共感したり、必要な支援をしたり、励ます評価をすることが大切である。また、学力の中核となる資質や能力が子どもたちにどのように身に付いているかを把握して、学習活動の支援に生かしていくために、学習指導要領に示す図画工作科の目標に照らして、観点別に評価する必要がある。よって、評価計画を立て、具体的評価基準に基づいた評価を行うことが大切である。

【図画工作科における観点別評価の観点】

造形への関心・意欲・態度	自分の思いをもって、進んで表現や鑑賞の創造活動を楽しみ、表現の喜びを味わおうとする。
発想や構想の能力	感じたことや考えたことなどをもとに、想像力を働かせて自分らしい発想をして、よさや美しさなどを考え、豊かな表現の構想をする。
創造的な技能	表現の意図に応じて創造的な技能や造形感覚を生かす。
鑑賞の能力	造形作品などに親しみ、そのよさや美しさなどを感じとったり、味わったりする。

【評価の方法】

	診断的評価（事前）	形成的評価（学習中）	総括的評価（事後）
目的	子どもの実態把握のため ・題材についての興味・関心 ・題材に対する学習経験 ・材料・用具に関する理解 ・題材に関連する知識、経験	授業の中で、学習指導に生かしていくため ・学習目標を再認識させる。 ・思考や表現への自信 ・自己評価への援助 ・目標からはずれた子への援助	題材終了後に定着状況の確認のため ・子どもの変容を見極め、今後の指導資料とする。 ・教師の反省材料とする。 ・資料の提供
方法	・行動観察 ・発問 ・記述	・行動観察 ・作品 ・自己評価、相互評価	・話し合い ・作品 ・記述
観 点 別 学 習 状 況 の 評 価			
分析	・個の状況確認	・表情、発問、行動の観察 ・作品やカードから評価 ・自己評価、相互評価を導入	・作品の分析
学 習 推 移 表 の 作 成 ・ 利 用			

資料1 自己評価表と相互評価表

自己評価カード	
名前（ ）	
今日の図工の学習をふりかえってみましょう。	
1 今日の図工の学習は、楽しくできましたか。	はい どちらでもない いいえ
2 自分の思いや考えをいかせましたか。	はい どちらでもない いいえ
3 自分の考えたやり方で工夫できましたか。	はい どちらでもない いいえ
4 先生に声をかけてもらって良かったですか。	はい どちらでもない いいえ
5 友だちの作品のよさを見つけられましたか。	はい どちらでもない いいえ
6 次の図工の時間が楽しみですか。	はい どちらでもない いいえ
思ったことを書きましょう。	つぎにやりたいこと・準備

※自分のよさを見つける自己評価カード
（毎時間の学習終了時）

不思議な世界へ		
名前（ ）		
1 あなたの考えた「不思議な世界」の題名とお話を書きましょう。		
題名	お話	
2 自分の絵に対して感じたこと Aよくできて満足 Bあまり満足していない C満足していない		
3 自分の作品を見てABCに○をつけましょう。		
①自分の想像したことを絵に表すことができた。	A B C	
②構成が工夫されている。（前後の関係・ものどもの重なり）	A B C	
③自分の想像した色になっている。	A B C	
④絵の具の使い方を工夫した。	A B C	
4 自分の作品を見てよいところ、工夫したところを書きましょう。		
5 友だちの作品を見てよいと思ったところを書きましょう。		
さん	さん	さん
6 先生から		

※自分のよさと友だちのよさを見つける
鑑賞カード（鑑賞後）

発見カード	
さんへ	より
こんないいところ発見	ここは、こうするといいかも？

※友だちのよさを見つける発見カード
（表現の過程で）

V 授業実践

1 題材名「不思議な世界へ」

2 題材設定の理由

(1) 題材観

本題材はA表現(1)ア「表したいことがよく表れるように、形や色などの特徴や美しさをとらえ、画面構成など表し方の構想を練って絵にしたり、版などに表したりすること」をうけ、子どもが持っている柔軟性のある考えを引き出し、その考えを絵によって表現させようとするものである。

そのような子どもの素晴らしい部分を充分生かせる題材の一つが空想画だと考える。

児童は、これまでに水彩絵の具などの使い方を工夫した表現方法を造形活動で体験してきている。本学習は、これまでの造形活動で体験した表現方法を駆使しながら、子ども一人ひとりが自分の思いにあった不思議な世界を創り出していくことになる。また、本学習では不思議な世界を生み出すために身の回りにある何気ないものや絵の具遊びの中で偶然にできた作品などを発想源にそこから生まれるイメージを大切にしながら自分だけの思いや願いがかなえられる世界に入っていく。

また、場面構成においては、画用紙に描く前に自分の思いを簡単な絵や文に表してみる。そうすることで自分の思いがはっきりしたものになり、そこからさらに新たな発想が広がることも考えられる。彩色においては、そのものの色にこだわらず、自分のイメージで色を選んでいけるようにする。

(2) 児童観 (省略)

(3) 指導観

子どもは想像の主といわれ、身近にあるものをすぐに遊び道具にしたり、何かに見立てて夢や願いを託したりする。本題材では、そのような柔軟性のある子ども達の考えを絵によって、表現させようとするものである。

しかし、何もないうところから「さあ、空想してみよう」では、なかなかイメージが浮かんでこないと思う。そこで、イメージを広げるために、発想源になりそうなものを集めさせることを題材の導入の前に予告しておいたり、絵の具遊びをさせて、それから発想を広げていけるようにしたい。

構想の段階に入る前に、自分の想像したことを簡単なスケッチや文に表すことで、おぼろげな自分の思いをはっきりさせ、そこからさらに新たな発想が広げさせ、自分の主題をきめさせる。

彩色においては、これまでの色の概念を取り払い、絵を描くときには、描く人の感じ方や思いで、色を選んでいいことを知らせ、不思議な世界を表現するために児童が自分のイメージで彩色していけるようにする。また、彩色の方法や用具、画用紙などについても児童一人ひとりのイメージにあったものを選ばせ表現の幅を広げていけるようにしたい。

そのような学習をしていく中で、子ども一人ひとりの表現意欲を高めていきたい。

3 題材の目標

- (1) 自分らしい主題を見つけ、想像力を働かせ思いのままに表現する。(関心・意欲・態度)
- (2) 想像した世界の不思議さなどがよくわかるように工夫しながら画面を構成する。(発想や構想)
- (3) 創造したことの場面にあった色や形を組み合わせる表すことができる。(創造的な技能)
- (4) 自他の作品のよさや面白さを味わうことができる。(鑑賞)

4 指導計画 (省略)

5 評価計画 (省略)

6 本時の指導

(1) 題材名 「不思議な世界へ」

(2) 本時の学習目標

自分のイメージした世界にあった感じがよく表れるよう工夫して彩色することができる。

(3) 授業仮設

子供の発想を大事にし、そのものの色にこだわらず、自分のイメージで配色や彩色を工夫していけるような支援をしてやることによって、自分の表現製作に自信を持ち、喜んで表現活動に取り組むであろう。

(4) 準備

児童：サインペン、水彩用具一式、その他児童が選んだ材料

教師：視覚資料（絵画作品）、色紙、水彩色鉛筆、コンテ、マーブリングやスパッタリングなどの道具、学習カード

(5) 展開

観	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評 価
思い を持 つ へ 5 分	1. めあてを確認する。	・ 学習カードと作品でどんな不思議な世界をどんなふうに表現するか2～3人に発表させる。	・ 自分の表現したい方法を考え見通しをもっているか。 (観・聴) (観・学習カード)
	不思議な世界がよく表れるように色のぬり方を工夫しよう。		
思い を 表 現 す る へ 35 分	2. 自分の想像した世界にあった感じの色を考えて彩色する。	・ 自分の表現にあった材料・用具の準備をさせる。 ・ 参考作品を見せ、配色や彩色の工夫に気づかせる。そのものの色にこだわらず自分のイメージを大切ににする。 ・ 新しくイメージしたアイディアも積極的に取り入れさせるが、そのままめらせるのではなく、「お試しコーナー」で実際に試した後に取り入れていくようにさせる。 ・ 配色に困っている子には、どこをはっきりさせたいのかを確かめ、強くする場所、弱くする場所に気づかせる。	・ 不思議な世界の美しさを自分なりにとらえ、効果的な配色を考え表そうとしている。 (観・聴) (観・聴) ・ 自分の表したい場面のイメージにあった表現方法を使い、効果的に表そうとしている。 (観・聴) (観・聴)
	3. 彩色ができたら、磨しながらめ、自分の表したいことや不思議さがよくわかるか確かめ、彩色の仕上げをする。	・ 彩色ができた人には、その子のよさを認めた上で自分の表したいことや不思議さがよくわかるか確かめさせ仕上げをさせる。	
よ さ を 見 つ け る へ 5 分	4. 今日の学習の様子を記録する。	・ 学習カードに感想・反省を書かせる。	・ 自分や友だちの作品のよさに気づき、自分の作品に生かそうとする。 (観賞) (学習カード)

コンテとぼかし網を使って



マーブリングを工夫して



にじみを効果的に使って



7 検証授業の考察

(1) 魅力ある題材について

子どもたちは「不思議な世界へ」の題材から自分なりの主題を決め、それぞれ描いたイメージをもとに表現し、個性豊かな作品に仕上げていった。そのことからこの題材に対する興味・関心の高さがうかがえた。

表現活動に取り組むにあたっては、表現材料を自分の思いに合わせて自由に選択していけるようにしながら技法についてもこれまでの造形活動で体験した表現方法を駆使していけるようにし、創造性が発揮できるようにした。

画用紙や和紙など数種類準備した中から自分のイメージにあった色や材質のものを選ばせると、和紙の微妙な色の変化や吸水性のよさからくる修正の難しさに気づいたり、画用紙にマーブリングなどの技法を使って、自分のイメージにあった画用紙を作ってから製作にとりかかる姿も見られた。

彩色に関しては、水彩絵の具を用いた子が多かったが、色鉛筆、水彩色鉛筆、コンテ、クレヨン、墨なども使い、混色、重色、にじみ、ぼかしなどいろいろな技法を自分なりに工夫していた。用具については、筆の他に歯ブラシ、ストロー、たんぼ、割り箸などを使い、それぞれの特性を生かした効果的な使い方を試行錯誤する中で発見していった。

Y子の思いの深まり

思いをもつ(お話とラフスケッチ)

不思議な世界へ
名前 Y.Y

題名
時計の中には コタマがいる

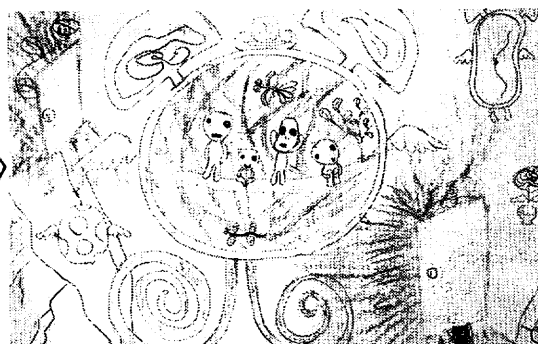
題名をつけたわけ
時計の中にコタマがすんでいると
おもしろいだろうと思って

あなたはどんな世界を想像しましたか。
めざまし時計の中にオオスダがいて人間の
うしろ生き物が2ひきいて、2ひきすわっている。
めざまし時計には、はねがついている。
足かくるくるになって 目かくるくるになって
いる。ほかに生き物がいて太陽がねえ、いる

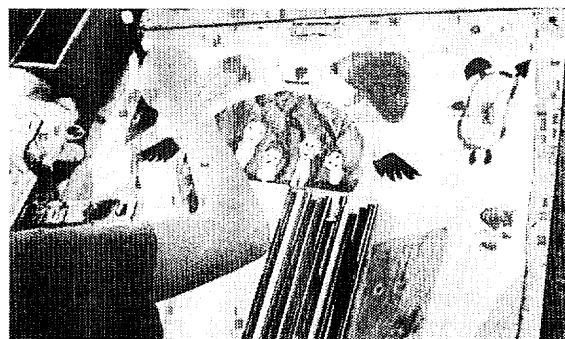
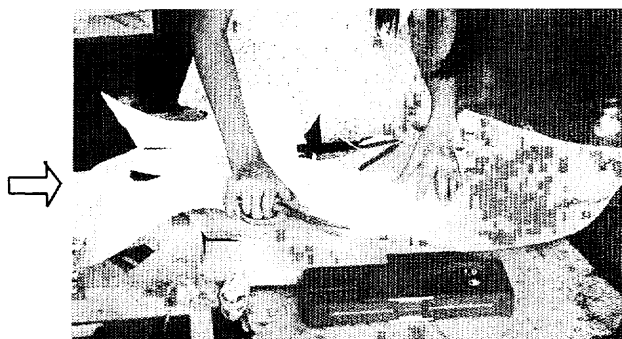
ドがきをするときに工夫したいところ
ていねいに こまかくかきたいです



思いを構想する(下絵)



思いを表現する(彩色)



(2) 個に応じた支援について

絵を描くことに苦手意識を持っている子が多い学級の実態から題材を設定するにあたり、写実性を要求せず子どもの持っている想像力を発揮できる題材の設定に重点を置いた。事前にイメージを膨らませるためのゲームをし、遊びを通してイメージトレーニングをしたので、すんなりと創造活動にはいることができた。

思いをふくらませることはできたが、いざ表現活動にはいるとなると、技能面での壁にぶつかる。そこで、趣の異なった参考作品を見せながら、絵の表現方法はいろいろあり自分の思いで色や描き方を変えてもよいことに気づかせることで生き生きと表現活動に取り組んでいた。また、「お試しコーナー」を設け、用具の紹介、技術の紹介をすると、自分なりにいろいろ試みながら、新しい表現方法を発見したり、工夫をさらに重ねていくなど、体験を通していろいろな技法を身につけていく姿が見られた。描けないで困っている子には、子どもの思いや意図を認めた上で、相談相手となったり、子どもに選択の余地を与えながら助言をしたりすることで、多くのことに気づき、成就感や充実感を味ったようだ。さらに、学習カードを作成し、毎時間反省をしながら進めたことで、見通しを持ち進んで表現活動に取り組んでいた。

鑑賞会では、どの子も自分の思いをうまく表現できた事を喜び、自信を持って自分のよさを発表することができ、満足しているようであった。

彩色の場における支援
主題「海の中の地球」



教師の言葉かけ

【彩色の準備になかなか取りかからず何か迷っているふうであったが、教師が机間巡視をしたときに話しかけてきた。】

Y・K 「下絵までは自分の想像通りにかけたが、どこから彩色したらよいか迷っています。」

教師「あなたが一番描きたいのはどれ？」

Y・K 「椰子の木です。」

教師「夕方の海に昼間の海がすいこまれる世界をかいているけど、その感じが出せるようにするにはどうしたらよいか？」

Y・K 「・・・」

教師「自分のイメージした色に近づけるように彩色してごらん。」

【その後、パレットに紺や緑、赤などを入れて、幻想的な色を作って椰子の木を彩色する。それから夕方の空の色もにじみをうまく使って手際よく塗っていた。】

※夕焼けの絵はがきを発想源にしていたが、それと同じ色にせず、自分のイメージを大切に想像した世界の色に近づける工夫をしていた。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- ・一人ひとりの思いを自由に発想していけるような題材を設定し授業実践を行った結果、子どもたちはいろいろな材料や表現方法を駆使しながら発想をめぐらせ、どの子も夢中になって表現活動に取り組む姿が見られた。
- ・各過程において、子どもの思いや意図に共感しながら支援をすることにより、子どもは、認められた喜びと自分のよさに気づき、自信を持ち意欲的に表現活動に取り組んでいた。
- ・出来上がった作品にはどの子も喜びを感じているようである。それは授業前のアンケート（絵が好き30%）と授業後のアンケート（絵が好き80%）にも表れている。

2 課題

- ・子どもの思いを素早く見取り、その子に応じた支援の在り方を考えていきたい。
- ・図工科における評価は情意的な側面が強く量的な測定が困難であり、さらに研究の余地がある。
- ・子どもの思いを大切にする授業を展開していくにあたっては、時間が超過しがちであったので指導計画の見直しや時間配分等の工夫をし、限られた時間内で終わるようにしたい。

<主な参考文献>

西野範夫編者	『あたらしい学力観に立つ授業展開のポイント』	東洋館出版社	1995年
文部省	『新しい学力観に立つ図画工作の学習指導の創造』	日本文教出版株式会社	1994年
〃	『指導計画の作成と学習指導』	〃	1992年
〃	『あたらしい学力観に立つ図画工作の授業の工夫』	〃	1995年
岡田愨吾著	『だれでもできる図画工作の授業』	〃	1995年